

第11回「泉大津市orium随筆賞」

【泉大津市長賞】

先生が花丸をくれたハンカチ

大野 敦子・大阪府泉大津市

小学5年生の時、学芸会で劇をすることになった。

その劇の題材は『宇宙人のしゅくぐたい』。小松左京先生が書いた児童向けのSF短編集のひとつだ。

物語はヨシコという少女の前に、3人の宇宙人が現れるところから始まる。宇宙人たちは、戦争をして環境破壊を繰り返す地球人が科学を進歩させ、宇宙を行き来できるようにすると宇宙の安全を脅かされると感じたため、地球を滅ぼしにやってきたというのだ。ヨシコは「私が大人になったら戦争をなくし、地球環境の破壊をやめさせるから滅亡させないで」と懇願し、『宇宙人のしゅくぐたい』を託された、という話だ。

配役を決める際、私は物語の最後に出てくるヨシコの母親役に立候補した。

当時、私はクラスの女子児童の中でも身長が高かったため、この物語の中で演じるなら母親役がしっくりくるのではないかと思ったからだ。それに人前が出るのが苦手な私は、ワンシーンしか出ない母親役ならちょうどいい、とも思った。

こうして配役が決まり、劇の練習が始まる。どんどんと本番が近づく中、私は何かが足りないような気がしていた。

私が演じるシーンは、実は道端で倒れてしまったヨシコが病院に運ばれ、やっと目を覚まし、傍にいた母親が安堵するシーンだ。それなのに手ぶらでは変だろうと思った。娘がやっと思を覚ましたのに、泣かない母親はいないだろうと感じた。

本番前日の夜。私はタンスの一番上の段の小さな引き出しを開けた。その中には自分の母親のハンカチがある。ピンクの花柄の、大人っぽいハンカチ。それを拝借し、衣装とともに鞆の中に詰めた。

本番当日。私は「ヨシコ、起きて起きて」と演技をした。ヨシコ役の友人が目を覚まし、体を起こす。私はヨシコを見てホッとし、ハンカチで涙を拭う仕草を見せた。

そして、無事に自分の出番が終わり、劇も何事もなく終演を迎えた。

後日、私たちは劇の感想文を書くことになった。私は母親役に決まった時の心境を書き、提出した。

すると数日後、先生から返された感想文には、赤いペンで花丸が描かれていた。「何かいいこと書いたっけ？」と思いつながら原稿用紙を見ると、外枠に先生の言葉が綴られていた。

「お母さんが泣くシーンでハンカチを持ってくるのは偉い！先生が指示していないのに、

想像力豊かで感動しました」

私は先生がハンカチに気づき、花丸をくれたことがとても嬉しかった。ハンカチを持つか持たないかなんて誰も気づかないと思っていただけ、こうやって見てくれたんだと、心から喜んだ。

あれから20年以上経った。今でも花丸をくれたハンカチを思い出すのは嬉しかっただけではなく、私の今の仕事の原点になっているからだと思う。

私は今、脚本家を生業としている。先生に褒められたから役者を目指せばいいものの、やっぱり人前に出るのは恥ずかしい。

だけど、小さい頃から漠然とあった「物語を書いてみたい」という夢を叶え、私は今、この原稿を書いている。

ハンカチ一つで人生が変わるわけではない。でも変わる人生だってある。

先生があの時、ハンカチに気づき、花丸をくれたから、私は日常に生きる人の細かなところを目を向けられているという自信がついた。ヨシコの母親を演じたことで、シーンの意味を考え、心情を巡らせることができた。それは物語を紡ぐ上で大切なことで、脚本の役に立っていることは言うまでもない。

先生は今、どこで何をしているだろうか。もし私が脚本家になっていることを知ったら驚くだろうか。それとも「ピッターやね」と言ってくれるだろうか。

花丸をくれたハンカチを思いながら、私は今日も邁進する。自分が書いた脚本の映画やドラマが、先生の元に届くように。